

#### 4. 中耕遺跡の調査の意義

中耕遺跡は越辺川の沖積地内に形成された自然堤防上に形成されていた。縄文時代の遺跡はもとより、古墳時代の遺跡までがこうした沖積地内で営まれていた事実は、われわれ現代人の居住に不適当な環境でも、かつては居住に快適な時期があったことを示している。現在の河川流路から判断される自然堤防以外にも、沖積地内の埋没河川による微高地があり、こうした部分に選地する遺跡の確認は容易ならざる作業である。中耕遺跡でも仮に墳丘をもつ周溝墓が水田中に顔を出していなかつたら調査対象とされたか断言できない。沖積地内の遺跡が調査対象となっているのは当然のこととして、中耕遺跡のような現状で把握できない平坦な部分での遺跡検出にも不斷の努力が要請されるのである。遺跡を見過すことにより地域の正しい歴史認識ができなくなるばかりか、汎日本の歴史理解が損われることは、言うまでもないことである。

次に四隅切れ周溝墓の発生と展開、北武蔵地域への伝播についてふれておこう。

所謂四隅切れ方形周溝墓の四隅掘り残し部分は方台部とその外部への通路としての機能しているものと考えられ、山陰から北陸地方にかけて分布する四隅突出形墳丘墓の突出部分と同一の意義を有するとする考えに異論をはさむ研究者は少ないだろう。

日本列島での方形周溝墓の発生は和泉市池上遺跡（第2阪和国道内遺跡調査会1971）で見られるような全周形の周溝を巡らし、方形（厳密には長方形）の方台部プランをもつもので、大阪平野の弥生前期末頃の事象である。これとほぼ時期を同じくした、尾張地方の愛知県山中遺跡（服部信博ほか1992）では弥生時代前期末の四隅切れ周溝墓が発見されており、さらに同県の朝日遺跡（石黒立人ほか1991）では中期の古い段階で四隅切れ周溝墓が成立しており、こうした四隅切れ周溝墓がその系譜の初現であることはほとんど誤りない（石黒立人氏によれば朝日遺跡の周溝墓は四隅切れ以外の、二隅の切れる形態の周溝墓が前期末に出現しているのではないかと推定するが現状では如何とも確定しがたい。型式学的連続性を重視するならば非四隅切れ系の方形周溝墓の出現は四隅切れ系の出現と同時かその後と考えるのが妥当といえまいか。石黒立人1987）。その後四隅切れ方形周溝墓は東海地方を中心に拡大し、畿内周辺や北陸・関東地方へと拡散して、「東日本型周溝墓」と呼称されるように方形周溝墓の主要形態として存在している。

北武蔵では行田市小敷田遺跡（吉田稔ほか1991）で弥生時代中期須和田式期の方形周溝墓が、東松山市大正寺遺跡（鈴木孝之1991）、浦和市明花向遺跡（剣持和夫ほか1984）、朝霞市宮戸ハケタ遺跡（肥沼正和1976）では中期宮・台式期の周溝墓が発見されており、先進地からやや遅れるものの、広範な水田経営とともに新来の墓制として導入されている。それらの平面形態はいずれも四隅の切れるもので、安定した形態として受容されている。その後、弥生時代後期段階では東国各地で非四隅切れ形周溝墓である全周系周溝墓（周溝の全周するもの、一隅が切れるもの、一辺の一部にブリッジを有するもの等—ここでは全周系と呼称しておく）へ転換がなされ、北武蔵南部の大宮台地や入間台地の南部地域もその例外ではないが、中耕遺跡の所在する北西武蔵域の所謂吉ヶ谷式土器の文化圏では一貫して四隅切れ形の方形周溝墓の築造が保守的に継続される場合が多い。これは南関東系の土器（詳細にはいくつかの小分布圏が提唱されているものの、汎南関東系土器文化圏として包

括できる）と比べ狭い分布範囲をもち、西北武藏の地域色である吉ヶ谷式土器文化圏の墓制面での特質である。

この方形周溝墓の形態が出現期に変化を生じるが、新たに導入されたのは全周系の周溝墓であり中耕遺跡での周溝墓群のあり方は方形周溝墓の形態変革の状況を示すものと考えられる。

墓域がほぼ面的に把握でき、その変遷の状況が明確にできる北武藏北西部の墳墓群として中耕遺跡の周溝墓群の調査はまことに重要な意義をもってくる。

方形の周溝墓・低墳丘墓（墳）の系譜については田中新史氏の論述（田中新史1984）に詳しい。同氏は周溝墓の周溝に外方と連絡する通路の出現とその発展の経過を詳細に分析し、方形プランの低位墳丘墓、所謂方形周溝墓から前方後方墳の出現過程を明確にされている。

中耕遺跡で伝統的な四隅切れ周溝墓の築造が全周系の周溝墓に交替しそして前方後方形の周溝墓も出現し墓域としての終焉を迎えている。具体的には S R 6 と S R 42（前方後方形の全国的斉一性を重視するならば古墳と評価、呼称しなければならないが、ここでは伝統的な呼称に終始しておく）であるが、規模の大きい S R 42 の被葬者は中耕遺跡の周溝墓群の形成に係わった集団の首長と見ることもできよう。それまでの四隅切れ系の周溝墓の被葬者が集団内の家長的な存在であったものが、この時点で村落を統括する立場の人物が析出したという解釈も成り立つ。

おそらく S R 42 が構築されて中耕遺跡の周溝墓群の形成が完了するのと前後して周辺地域では S R 42 の約 2 倍の主軸長を有する大形の前方後方墳、東松山市諏訪山29号墳（増田逸朗1986）や、吉見町山の根古墳（吉見町1978）、あるいはやや距離が離れるが江南町塩19、20号墳（菅谷浩之1984）が出現するものと思われる。しかしながら規模の点からすると本遺跡の S R 42 と諏訪山29号墳・山の根古墳との格差は顕著であり、S R 42 が村落集団の長としての立場であった可能性が強いのに対して、諏訪山古墳や山の根古墳の被葬者は複数の村落集団を統括する地域首長の立場であったと理解するのが妥当であろう。塩19・20号墳についても S R 42 より一回り大きく、主軸長34.5(20号墳)－38m (19号墳) で、高い墳丘を遺存させており、これも地域首長の墳墓と考えておいたほうがよいだろう。

実は隣接する広面遺跡（村田健二1989）での S Z 9 (格塚) も前方後方型周溝墓の変形したあり方と理解しているが、これとともに中耕遺跡 S R 42 の出現は北武藏西北部での前方後方墳時代（古墳時代）の幕開けを告げる歴史的なモニュメントとして存在するのである。

また、四隅切れ形の周溝墓に関しては、具体的な資料分析を伴わずに見通しめいたことを述べるのは粗暴のそしりを免れないが、邪馬台国の所在を畿内に考える立場では、魏志倭人伝に記述された邪馬台国の南方の句奴国的位置は東海西部地方に考えるのが最も妥当な見解であろう。そうした場合、四隅切れ方形周溝墓が創始・確立されて盛行した尾張地方と、句奴国（弥生時代の中でどこまで先行して存在していたのか必ずしも明確ではないが）の位置が重複してくるのである。そうした場合、四隅切れ方形周溝墓が句奴国勢力の創始した周溝墓の形態であった可能性が生じてこよう。そして、その分布がとりもなおさず彼らの勢力範囲としておさえられるのではないかと密かに私考している。東海から北陸・関東にまで分布するこの形態の周溝墓の広範さは、邪馬台国に服属しない彼ら句奴国とその傘下にあった連合体が広域かつ強大なものであったことを窺わせるのである。

本書で触れられなかった問題点や見通し等については別稿にゆずることとする。  
また、多数の学兄に遺跡、あるいは整理中に来訪して指導・助力をいただいた。それにもかかわらず厚意を生かせなかったことを御寛恕いただきたい。

## 註

- 石黒立人ほか 1991 『朝日遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター  
服部信博ほか 1992 『山中遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター  
石黒立人 1987 「伊勢湾地方における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル7』愛知考古学談話会  
石村喜英 1982 『宮戸ハケタ遺跡発掘調査報告書』 朝霞市教育委員会  
剣持和夫ほか 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
村田健二 1990 『広面遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
吉田 稔ほか 1991 『小敷田遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
鈴木孝之 1991 『大正寺・大西』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
菅谷浩之 1984 『北武藏における古式古墳の研究』児玉町教育委員会  
田中新史 1984 「出現期古墳の理解と展望」『古代77』早稲田大学考古学会  
第2阪和国道内遺跡調査会 1971 『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書4』  
増田逸朗 1986 「東松山市諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室  
吉見町 1978 『吉見町史』

## 方形周溝基出土の木製品文献

- 1 本書
- 2 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 『小敷田遺跡』
- 4 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 『瀬名遺跡』
- 5 浜松市遺跡調査会 1982 『椿野遺跡』
- 6 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991・1992 『平成2年度の調査』・『平成3年度の調査』
- 7 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡 I ~ IV』  
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1991・1992 『朝日遺跡 I』・『朝日遺跡 III』
- 8 三重県教育委員会ほか 1990 『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報II』
- 9 滋賀県埋蔵文化財センター 1991 『滋賀埋文ニュース第136号』
- 10 奈良県立橿原考古学研究所 1986 『矢部遺跡』
- 11 (財)東大阪市文化財センター・東大阪教育委員会 1987 『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』
- 12 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1980 『瓜生堂』  
大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1981 『巨摩・瓜生堂』
- 13 読売新聞1993年3月10付朝刊